

南小国町

歴史 本町は、北の小国町と共に古くから小国郷と呼ばれ、藩制時代は総庄屋によって統轄されていましたが、明治二十二年町村制

施行とともに北小国村、南小国村に分かれ、その後いずれも町制施行（本町は昭和四四年）し、今日に至っております。

小国地方が弥生式文化期にすでにひられていたことは、出土する銅銚などによって知ることが出来ます。また阿蘇氏が国造（くにのみやつこ）として勢力を持つようになってからは、小国もその治下になったのでしょうが、阿蘇神社の二宮、三宮が小国両神社の高橋宮、火宮として祀られているのも、その関係を物語るものです。平安期以

あがるこの温泉は湧出量の豊富さと泉質多様が特長で、温度は実に九六・五度にも達し、ホテル・旅館も多く、夏は温泉つきキャンプ場も開設されることから人気も上々。

これら三つの温泉は「南小国温泉郷」の呼び名で、国民保養温泉地として国の指定を受けています。

わが村

九州の屋根・九重連山の西に位置する南小国町は、東西一六km、南北一二kmで、概ね長方形をなし、その面積は一一、五九八ha、人口五、五四九人で、九州の軽井沢と称され、自然環境に恵まれた住み良い町です。

別府阿蘇道路（やまなみハイウェイ）が走る瀬の本高原からの眺望は素晴らしい、阿蘇の五岳を中心に外輪のやまなみ、左に祖母・傾の山々（宮崎県）、右には遠く背振山（佐賀県）英彦山（福岡県）などの山々が一望できる景観は、真に壮観な一大パノラマを呈し、標高九〇〇mに遊牧する肥後赤牛の群れは、訪れる人の心に安らぎを与えます。

気候

海抜四〇〇mから九〇〇mであるため、年平均気温摂氏一二・五度、盛夏でも三〇度を超えることは稀で、雨量は年平均二五〇ミリにも達して山林の成育に適し、一大林業地帯を形成しています。

観光

本町内には湯量豊富な温泉源が多く有り、中でも黒川・田の原・満願寺の各温泉地は訪れる観光客に愛され親しまれています。

△満願寺温泉▽志津川の清流が往古の歴史をひめて流れる辺にあり、清澄な泉質と文永二年（一一七四年）蒙古襲来の際に敵国降伏、国家鎮護祈願のため、北条六郎平時定が龜山天皇の勅宣を請い、山城国醍醐寺の経果大僧正を招いて建立した真言宗の立護山満願寺をはじめとする数多くの国・県指定の重要文化財や八十八箇所霊場など、付近に数々の史跡名勝を有しております。

清涼な水流に育つ「小国米」は美味しい銘柄米として引合い殺到、広大な草原は国の畜産基地として胎動しつつあり、さらには国の産地指定を受けて「小国大根」も順調な生産が続いています。今後とも恵まれた自然環境を生かし、農林業を基盤とした観光開発を推進し「祖先を敬い老人を大切に、父母に感謝をする人間形成」と清潔で明るい住み良い豊かな町づくりにつとめていきます。

“大自然に育まれた生活環境”

降から戦国の時代にかけて、小国の各地を根拠地とする幾人かの豪族がいましたが、東に大友氏、南に阿蘇氏、西に菊池氏等があり、今に残る古城跡、遺跡等は兵（つわもの）どもの栄枯盛衰の跡を伝えるものといえましよう。

農林業

本町の総面積の九一・八%にあたる一〇、六四六haが林野で、このうち草原が約四〇六三haもあることが特徴で、これに対し耕地は六八八ha弱にとどまり、森林への依存度が如何に高いかを示していると言えましよう。この森林は民有林五三三九ha、町有林七一八ha、国有及び官行、県行造林合せて五二六haで、国土緑化保全、治山、治水など公益的機能にも大きな効果を与えています。

近年は木材需要・価格の低迷に加え、伐木造材・搬出経費などの高騰と、山林従事者の高齢化などから、元来、本町の林業は一般建築用材（三五～四〇年生で皆伐していた）生産を主体としていましたが、より一層の所得増大を図るための特殊用材生産が軌道に乗りに、「えん桁材・人工絞丸太材・やき杉材」の生産が盛んに行われております。

小国地方が弥生式文化期にすでにひられていたことは、出土する銅銚などによって知ることが出来ます。また阿蘇氏が国造（くにのみやつこ）として勢力を持つようになってからは、小国もその治下になったのでしょうが、阿蘇神社の二宮、三宮が小国両神社の高橋宮、火宮として祀られているのも、その関係を物語るものです。平安期以

わが町

小国杉の美林



小国大根出荷風景

川の中にお湯が湧く満願寺温泉



あひるが遊ぶ満願寺温泉

